

# 江

4 今月の江戸しぐさ「いなかの入り、江戸の出」

江戸時代の人々の価値判断は粋な人間か、そうでは無い人間かで評価されていました。地位やお金ではありませんでした。

例えば、電車で座りがたい為に我先に駆ける人や、混んでいる場所で後ろから押すような人を品性が下品（げぼん）な人間、「いなかの入り」と表現し軽蔑し、悪いものを見て縁起が悪いと考えていました。

これに対し、平然と立ち、周囲を気遣い、出る前に自然にドアに近づいてさらりと降りるような、常に余裕を感じられる人を「江戸の出」、粋な人として評価していました。

自己中心的で調和的、自己客観的な認識ができず、感情のままに振る舞い、目先の損得の判断基準で物を考える余裕の無い人は、患者や家族に一定確率で存在しますが、余裕の無い顔、立ち居振る舞いとなり、それなりの人生になってしまっていることをその人達は知りません。

（因果といいます）

「いなかの入り、江戸の出」をおまじないにすると、自己中心的で下品な人に接した場合、怒りより哀れみや可笑しみを感じるようになります。

また、目先の損得ではなく、粋か、そうでは無いかを判断基準にすると、人生が変わる人がいるかもしれません。どうぞご活用を。

※日本人の自己客観視の特異な特徴は幕末、明治初期の外国人の多くに報告されています。

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

6歳までに習得すべき事とされていました。

判断の基準は粋かどうかだったようです。

他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。



日本の女性



ロバート フレデリック ブラム

Robert Frederick Blum

(1857~1903)

日本をこよなく愛したアメリカ人画家。

江戸の風情が強く残っていた明治中期に約2年半訪れ、当時の息づかいさえ感じる作品を残してくれました。